

井波一雄※ シラタマホシクサの分布について

K. INAMI : On the Distribution of *Eriocaulon nudicuspe* MAXIM.

邦産 *Eriocaulon* 属中の優品として知られるシラタマホシクサ *E. nudicuspe* はその分布が後述のように東海地方西部の伊勢湾北周辺に限られた珍稀な湿生植物であつて、その湿原における群落の見事な美しさはちよつとたえようもないもので9月中旬から10月にかけてその野生地は遠望、まるで白いレースをなびかせたようで広大な一望の湿地がこの小花でかすんだように埋まつてしまうところがある。

一年生草本であることと強酸性水湿向陽の地の緩斜面をなす山すそに限られる生育環境から分布の中心をなす本地方においても比較的狭い範囲に限られる上に、戦時中の水田拡張工事による水湿地の干拓に引つづく市周辺部における宅地化としての埋立工事などのため逐年その天生地は減少の途をたどりつゝあり、今こゝに今日までの筆者の調査を基とした分布記録を残して後日の証ともすべき価の少からざるを認め、併せて浅学尙調査洩れの御示教を仰がんとしたものである。

生態環境 総じて勿論太平洋斜面の主として南面せる海拔高50~100mの丘阜の裾正に原野に接せんとするような極緩斜面で、周年乾燥したり水没したりすることのない湧水源のある陽地で蔭蔽木や広葉草のないことが条件で、僅かにイネ科やイグサ科の低小草本以外生育しないような荒瘦湿原に限ることがかえつて本草の自然保護に益しているといえよう。水位の一定しない池底池辺や水流中、溜水上層の草木の多いところで夏期地床面が直射日光からさえぎられるところはいかに湿地といえども絶えて本種を見ない。

而して地質的には第三紀の新層から洪積層沖積層にわたつてすべて比較的新生の地層上に限られていて愛知県中央部の矢作川と豊川とに境された三河準平原たる花崗岩や片麻岩質山地には好適な水湿原野多きも全く之を見ないことも面白いと思われる。

分布圏 地理的に東は浜松近郊を限りとし三河に入つて豊橋市東郊山地の山足に一大群落地を展開しているがその西に注ぐ豊川を越して岡崎から西、矢作川までの花崗岩質丘陵には全く之を産しないこと既述のとおり（たゞ宝飯郡下本宮山麓洪積台地山足に一部生育を見るのみ）矢作川を西に越せばその洪積台地や三紀層が北に花崗岩質山地たる猿投山足に入りこむあたりからもう発生して西沿岸に点々と生育し名古屋の東郊第三紀新層台地の南北知多半島まで再び豊産大群落をつくり、北して木曾川をさか上つた恵那郡下中津川市周辺に分布の枝を出しているのは特異であるが、しかしこゝも木曾川を挟んだ第三紀層である。名古屋から西の沖積層には全く之を見ないが木曾川を西に越した三重県側の沖積層には北勢から四日市市周辺まで相当の量と範囲の分布を示すもそれ以南にはもはや知られていない。以上の分布地を総括してみると次の4大分布圏が考えられる。即ち東からまづ豊橋周辺、ついで名古屋周辺、北上して中津川周辺、そして西限である四日市周辺地区の

※ 名古屋市立東山植物園

それとなる。しかしここに確認しない産地としてその一は岐阜県美濃不破郡下の某地である。これは分布上あつてもよさそうでもあるが彼の慾齋飯沼翁の旧居平林荘も不破郡下であつたことから考えて、あのようなすばらしい珍品すら数多く描画した翁がホシクサ、イヌノヒゲやヒロハイヌノヒゲを取材しながら同じ郡下に生ずるとしたらそのシラタマホシクサを入手しなかつたであろうか、そうでなくとも彼のいう名府の地即ち名古屋では挿花用として花戸に陳べ、菊人形の材ともし又小児のカンザシ遊びとして古くより土人によく識られたこの草が彼の大著に入っていないことは不思議なことである。

佐竹博士によれば *E. nudicuspe* MAXIM. の原記載の材料は伊藤圭介翁からの標品を基としたものの由であるが、圭介翁が旭園といった別庭を設けた名古屋の東郊その旧蹟あたりは今日も尙この草が群生しているところから、この地方産の材料が前記マ氏に送られたと憶測すればこの地こそ正に Type Locality と考えられないであろうか。

産地 今日までに筆者の知り得た確実な生育地は次のようである。(数字は分布図中の番号をあらわす)

静岡県(遠江)浜松市近郊(1)

愛知県(三河)二川(2), 豊橋(3), 一宮(4), 泉(5), 高岡(9), 藤岡(6)

(尾張)瀬戸(7), 日進(10), 志段味(28), 豊明(11), 鳴海(8), 旭(29),
天白(12), 猪高(13), 半田(14)

三重県(伊勢)梅戸井(15), 県(16), 大池(17), 神戸(18), 玉垣(19), 飯野(20),
稲生(21)

岐阜県(美濃)中津川(22), 坂本(23), 落合(24), 福岡(25), 付知(26), 蛭川(27)

以上の外、出典を詳にしないが遠く四国伊予東宇知郡宇和及び北宇和郡御内に生ずることが小生の古いメモにあるが分布圏の上からもこれは何かの誤つた同定によるものであろう、現地の方の御教示を仰ぎたい。

ついでに愛知県産のホシクサ科植物を列記してみよう。次の11種2変種となる。

クロイヌノヒゲ *E. atrum* NAKAI

オオホシクサ *E. Buergerianum* KOERNICKE

コイヌノヒゲ *E. decemflorum* MAXIM.

イトイヌノヒゲ var. *nipponicum* NAKAI

ニツボンイヌノヒゲ *E. hondocense* SATAKE

ホシザキイヌノヒゲ var. *stellatum* SATAKE

ミカワイヌノヒゲ *E. mikaweanum* SATAKE et T. KOYAMA

イヌノヒゲ *E. Miquelianum* KOERNICKE

シラタマホシクサ *E. nudicuspe* MAXIM.

クロホシクサ *E. parvum* KOERNICKE

ヒロハノイヌノヒゲ *E. robustius* MAKINO

ホシクサ *E. Sieboldtianum* SIEB. et ZUCC.

シロイヌノヒゲ *E. sikokianum* MAXIM.

最後に分布の資料につき東三河については鳥居喜一氏、北伊勢については安井直康氏、

中津川地区については志津匡三氏に負うところ大であり、こゝに記して謝意を表する。

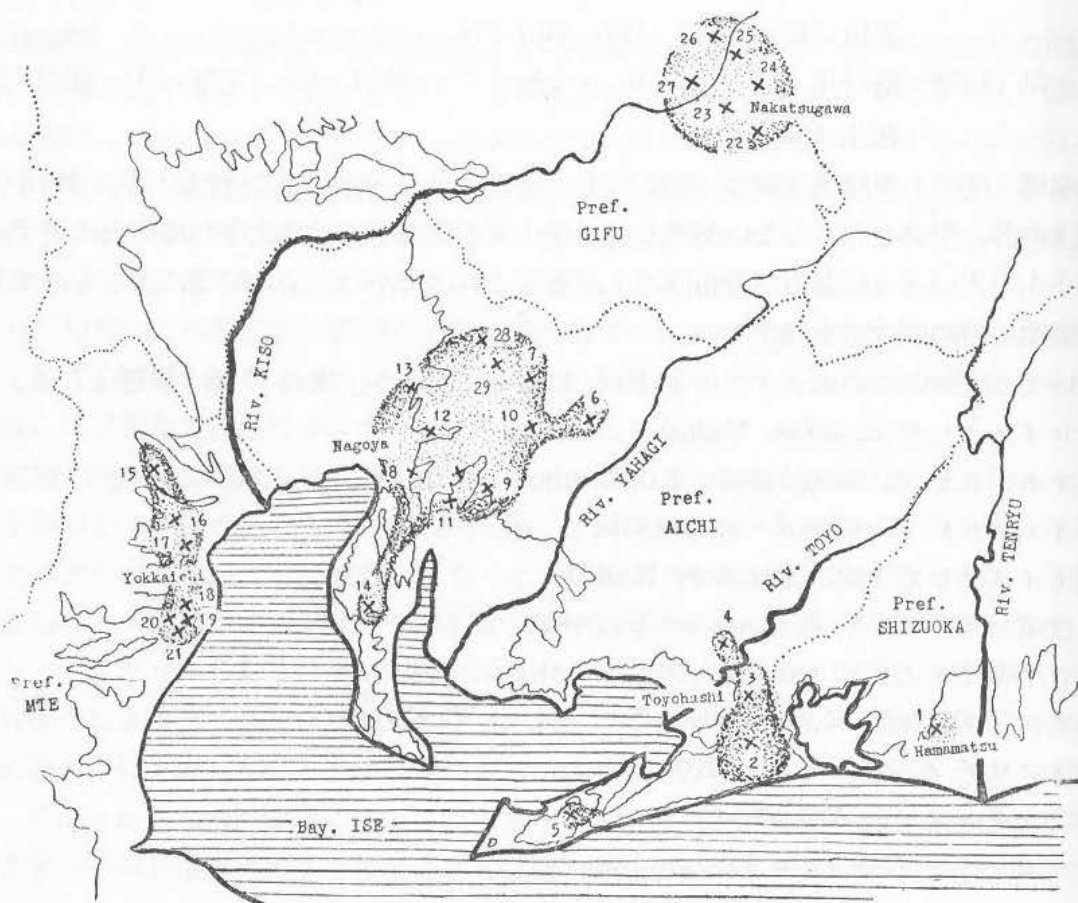
主要引用文献

1. 佐竹義輔：大日本植物誌ホシクサ科 (1940) — 2. Y. SATAKE : A Revision of the Japanese *Eriocaulon* (1940) — 3. 佐竹, 小山：イヌノヒゲ属の1新種 Journ. Jap. Bot. 30 : 114 (1955) — 4. 三重生物調委会：三重県産生物目録 (1951) — 5. 吉田裕：濃飛植物目録 (中部日本に於ける薬用植物の分布並にその利用栽培に関する研究 (1941))

Summary

The growth of *Eriocaulon nudicuspe* is limited to a certain environment: a gentle slope on the border of a hill and field; an open and sunny place with no tall grass or trees to make shadows; and a place that keeps moderate dampness moistening the surface of that area. In this case, the moisture is provided by a natural spring.

The limit of this distribution lies on the area which surrounds the northern



E. nudicuspe の分布図

点線は県境。細い実線は丘陵から平野に移行するところを示して本種生育地との関係を示現わす。×印の地名は本文参照。細点は分布圏の4地区を示す。

part of the Ise Bay in the center of the Japan Proper : as far as Hamamatsu on the east, to Yokkaichi on the west and as far as the environs of Nakatsugawa on the north.

Within these areas, there are four big growth groups, these are :

1. The group in the environs of Toyohashi (Prov. Mikawa)
2. The group in the environs of Nagoya (Prov. Owari)
3. The group in the environs of Yokkaichi (Prov. Ise)
4. The group in the environs of Nakatsugawa (Prov. Mino)

In the mountain area consisting of granite between the River Toyo and the River Yahagi, though there are a lot of moderately damp places, as I previously wrote, we cannot find any *E. nudicuspe* at all.

○ タチクサボタンに就いて (里見信生)

N. SATOHI : On *Clematis urticifolia* NAKAI

朝鮮産のタチクサボタンが佐渡に産する事は北川博士によつて報告された。[Journ. Jap. Bot. 31 : 303 (1956)]

然し、実は此の種は佐渡のみでなく、北陸の他の地域にも産するのである。最初に私がこの事について気がついたのは、私どもの教室の下沢伊八郎氏がブナオ山(石川県)?で採集された(1950年、秋?)標本を拝見して、クサボタンそのものと違うことを知つた時である。けれどもこの標本は2~3葉と種子の少数がついただけのもので、同定致し兼ねてそのままになつて居た。たまたま上京して北川博士に御会ひした折、話がそれに及び「タチクサボタンらしいものが、北陸にある」と御話をし、且、この下沢氏の標本を御送りする事を御約束したわけである。ところが歸つて来て、探して見たが、どうしたものか何処かに失つて、その約束を履行出来ぬ不首尾に終り、私には大きな借財を背負つた様な気持がしてならなかつた。その年、石川県七尾市から佐渡の小木まで便乗出来る船があつて、私にとって二度目の佐渡旅行となつた。此の時のコースは両津から金北山に登り、金沢村に降り、それから相川を経由して入川から再び金北山に登り、両津に降りた。タチクサボタンはこの時各所で採集出来たので、北川博士との御約束を果す事が出来て、漸く重荷を下した様な感が出た。この標本が北川博士の御報告に引用されたものである。これを要約すると、私が佐渡でこの種を採集出来たのはその前に下沢氏の標本を拝見して、注意をしていたからであつた。然し残念ながら、前述の如くこの標本は私の不注意によつて失つて居る事は残念である。

其の後、私は越中の刀利でこの種を採集した。こゝで問題になる事は佐渡でも越中でもタチクサボタンと共にクサボタンもあつて、その中間に位する様な形のものがある事で、この様なものはどちらに入れて良いか判断するに苦しむのである。近い将来こんな形のもを再び北川博士に御送りして御教示を乞ひたいと思つて居る。又、タチクサボタンの花の色もいろいろと変化があつて、ベニバナタチクサボタン *Clematis urticifolia* NAK. form *rosea* (NAK.) NAK. を佐渡入川で採集した。